

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

光陰矢のごとしといわれる如く、月日のたつのは早いもので、東日本大震災とそれともなう原子力発電所の事故が発生して、早や1年が過ぎさった。

しかし、今だに事故の解決は、遅々として進んでいない気がしてならない。

それは、メディアの報道が余り信じられないからである。何時のまにか我が国の報道は、報道の持つ使命を忘れ、ご都合主義になったのではと考えられることである。時事問題等のニュース報道を中心とするマス・メディアの活動全体をジャーナリズムと呼ぶならば、その本来の使命は、

- 1) 正確無比の情報の提供と伝達であり、
- 2) 多様な意見交換の場の提供と討論であり、
- 3) 報道の背景の追求と権力の監視である。

要は、高度情報技術社会では、ニュースの発信のメディア側にも公平、正確な情報の伝達という責任があるということである。

それは、報道に携わる者の職責であり倫理観におうものである。したがって、人間の心の倫理観、道徳観を考え、学ぶために「恭敬合掌の心を学び実践する」、「科学技術と技術者倫理を考える」、「日本教育の源流を学ぶ」ということについて考えてみた。

結果として、いえることは、全ての人々が幸せを求め前進、向上するために現実を冷静に見つめ対応することであり、各々のおかれている立場の職責をはたすことだと思考する。

仏教の世界では、あらゆる困難に遭遇しても不退転の心をもって対応することが教えられている。それは経験を生かす生き方である。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禪 禪 (野風生)
雅号 樹泉

2. 恭敬合掌の心を学び実践する

我れ我れ日本人は、一般的に両手の手のひらを顔や胸の前で合せ仏や神を拜んで、これを合掌とっているが、本来の合掌は、インドでは古くからの礼法の1つで、南アジア諸国のセイロン、ビルマ、タイ、ベトナム等でも現在も行われている礼法である。かならずしも仏や神にたいしてのみならず、世俗人の間でも相互に行われている。

インドでは右手を神聖な手、左手を不浄の手をして使いわける習慣があり、その両手を合わせるということは人間の中にある神聖な面と不浄な面が合一したところに、人間の真実の姿があるという現れとして、謙虚になり心をこめて、相手を信頼する態度の表現であるとされている。

我国の場合は、本来仏教の法華経方便品第二に「恭敬合掌し礼する」とあり、天台宗の解釈では、合掌は「権実不二」、いわゆる権教と実教、方便と真実は相異なるものだが、その実は1つであるとして、右手は実身の五蘊、いわゆる報身仏の身をさし、左手は権身の五蘊、いわゆる応身仏をさし、ありのままの真実心で合掌するとしている。

「恭敬合掌」とは、慈しみ敬う心を以って尊敬し合掌することを意味するが、

今日の日本人は、企業の経営者、管理者をはじめ全ての人々が信頼出来ず、尊敬し慈しみ敬え無い、といえ、いささか失礼かも知れないが、感謝合掌できる

